

Title	「伊藤 整(1905~1969)」
Author(s)	吉岡, 真緒
Citation	太宰治スタディーズ. 2008, 2, p. 35-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97241
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

追悼文を読む

「伊藤 整(1905~1969)」

吉岡真緒

太宰治が死んだとき、何とも言い知れぬショックをおぼえたことを、後に伊藤整(一九〇五~一九六九)は「生活演技説・修正」の修正(『文學界』一九五四・一一)で述懐している。当時四十三歳だった伊藤は、太宰のような「行為の上」ではなかったが「認識の上」で、自身も「似たような危機」にあり、それは四十歳前後の多くの人に現れる「生の不安」だったのだろうと振り返っている。

独自の文学観によって評論家、文学史家としても評価の高い伊藤は、生前から太宰に、それぞれ仕方は違うものの石川淳と坂口安吾とに共通する「時代の感情」の鋭い反映を見出し評価するという興味深い言葉を「創作合評会」(『群像』一九四七・四)等に残している。

太宰は戦時中に一度、伊藤を訪ねてきたことがあるという。そのときのことを伊藤は「死者と生者」(『早稲田文學』一九四八・八)で次のように回想している。出された酒をがぶがぶ呑み、開口一番に「犬が二匹向ひ合ひますね。するともう忽ち相手の実力を見抜きますよ。一方が尻尾を下げる。もつとも犬と猿ちや問題にならない」と言はでものことを「言った太宰の言葉から「一見純粹であるかの如き文壇的ソフィステイケーションで話をしやうと思つた」自分を見透かし「拒んだ」のだと感じた伊藤は、太宰の印象を「みんなが太宰君をいい人だと言ふが、私にはいやな人だった。でも私は本当に何かしら急速度で生きてゐる人に逢つたやうな気がした」と述べる。この訪問については「座談会 太宰治氏の死について」(『文藝時代』一九四八・八)でも触れており、席上、太宰の印象について聞かれた伊藤は「実に端倪すべからざる人物ですよ。あんなおつかない男はないですよ」と答えている。伊藤が太宰に感じるこのような印象は、おそらく次のような認識によるのだろう。「太宰治のやうに初め心中した相手が死んで自分が助かれば、そのあと死ぬ約束を繰りかへす外は何があらう。その前提の上に築かれた余生を送るものに俗物が見すかされるのは当然である。生存は、彼にとつては一刻づつ罪悪であつた」、「彼(太宰)は私小説で工夫を考へた。だから生活を工夫した。何のために。作品のために。何といふ怖ろしいことだらう。若し人が書くためにでなく、報告するために実人生を演戯したならば、それは死である。たわむれに生きることはできない」、「私小説に速度と工夫を与へることは、死でもつてしかできない。生活自体をフィクションとすることは生に執着する者には不可能だ」(『死者と生者』)。伊藤は太宰の「余生を送るもの」の眼差しと、

芸術家としてのあり方に「いやな人」「おつかない男」を感じ、自らを「俗人」と呼んだ。このような位置づけは、当時『小説の方法』（一九四八・二二、河出書房）を執筆中だった伊藤が、太宰の死と日本の小説について書いた「逃亡奴隸と仮面紳士」（『新文学』一九四八・八）に詳しい。

「逃亡奴隸と仮面紳士」で伊藤は、私小説について次のように言う。「日本の小説の自伝的性格、非造形的な方法、ヨーロッパの小説の方法の日本での成立の困難」は、実践された思想に感動を覚える日本人の性質ゆえであり、また、近代思想が日本に流入してから作家たちに意志された「完全に解放された人間像」の造形が、現世放棄者となることで確立した「エゴ」を持つ生活を実践した芭蕉などの方法の再現であったゆえとである。すなわち、任官や勤務による隷属を嫌い小規模な不安定な出版業者に食を求めたことで現世脱出し、風狂的生活の報告文を売る、社会的地位の低い「日本の社会の逃亡奴隸」が文士なのだ。日本近代小説の特性は小説技法の遅れではなく、現世の造形は現世への絆なしにあり得ないことを感じた作家たちの本能的回避であった。それ故政治への無関心もまたそれが隷属を強いる現世の力として回避されたのである。逃走し、現世の自己の立場を無に近いものにしてなされる生の批判は、極めて強力な日本の方法である。しかしその「近代文学作家」のほとんどが「自分の思想のために、妻子家族は滅茶苦茶にされるのが当然だ」とする「風狂的、絶望的思想家」であり、それが「日本の作家」であり「日本の近代」である。そしてその典型が太宰であると伊藤は言うのだ。しかし、私小説家の典型と見なしながら、一方で伊藤は太宰を「私小説に動きを与えた」との評価も下している。それが「報告するために実人生を演戯」するという、平野謙と共有した、いわゆる「生活演戯説」であった。様々に言葉を換えて表現されるものの、その内容は「描くために、描くに値する自己を、行為において形成するという形で彼等は生を実験した」『小説の方法』との言に集約されていると見ていいだろう。しかし、その三年後『現代日本小説大系53』（一九五一・四、河出書房）の「解説」で太宰文学に「私小説を分解し、効果的な部分のみを生かして、話の筋や順序を省略するといふ意識的な書き方」を見出しているのを見ると、「演戯」について虚と実の間で揺れ動く伊藤が見出せる。同時代の文人として太宰治を、その死すらも文学化した伊藤の指摘は意義深い。「俗人」との名乗りは、伊藤の文学的決意に他ならなかった。